

水木しげる氏

表紙絵

＝高くあがるぞ 鬼太郎風＝

表紙絵：水木しげる

- | | |
|------------------------------|-----|
| ・ 私のすすめるこの一冊 | 2～5 |
| ・ 第46回 樟まつり-共に生き、共に学ぶ- | 6 |
| ・ 読書会点描 | 6 |
| ・ 絵本の読み聞かせ講座 | 7 |
| ・ 法務ミニセミナー図書館の秘密(ひみつ) | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | 8 |

私のすすめるこの一冊

毎年恒例の皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です。
今年はどんな本と出会えるでしょうか。

『日本一短い「家族」への手紙——筆啓上——』

福井県丸岡町編 丸岡町文化振興事業団編 大巧社 <推薦者：石島望咲>

たった40字で心揺さぶる手紙があります。

丸岡町（現坂井市）が主催する日本一短い手紙コンクールに寄せられた「家族」への手紙6万通余り。この本には入賞作品240編が収められています。孫から祖母へ、妻から夫へ、まだ見ぬわが子へ。その中でもお気に入りの2編を紹介します。

- ・父は風呂場の君に、「熱くないかい」と聞いただけじゃないか なぜ水をかける
- ・やあ。出てきたね。どうだいこの世界は。しばらくは一緒に生きてゆくんだよ。ー誕生したわが子へ

前者は、目に浮かぶような光景に思わずにやりとさせられた手紙です。

後者は優しい眼差しながら、いつか来る独り立ちの日も胸をよぎる一編です。

愛情深さに胸を突かれたり、思いもよらない家族の形にはっとさせられたり時には恨みを綴った手紙もあります。綺麗なもののばかりではない、それでも切り離せない家族の縁の深さが、ひしひしと伝わってくる一冊です。

正月も間近。里帰りのお供にぜひ。



『風に向かっての旅』

ペーター・ヘルトリング著 偕成社 <推薦者：井上暁子>

戦争は条約が締結された日に終わるものではない。第二次世界大戦後、孤児になったドイツ人ベルントはチェコを追われ、おばさんとウィーンに逃れようとしていた。しかし、鉄道が整備されていないため国境近くで足止めを食らう。しばらく滞在した田舎町での生活はまだまだ混乱しており、殺された兵士を見たり、生きていくためのおとなの取引を目の当たりにしたり、時には危うく銃で撃たれそうになったりしながらも、わくわくするようなあふれる冒険心をもってベルントは生きていく。

また、両親を失い、寂しさに「自分が小さく小さくなって、太陽にとけてしまっただような感じ」を抱いたり、自分は一体何者なのかというアイデンティティを突き付けられたりする心情もうまく表現されていて胸にせまるものがある。

著者ヘルトリングの作品は子どもや高齢者など社会的弱者になりがちな人の描き方が秀逸だ。今年亡くなった氏への追悼も込めてお勧めしたい。

『ピーターラビットのおはなし』

ビアトリクス・ポターさく・え 福音館書店 <推薦者：佐々木功>

いたずらうさぎのピーターの表情が愛くるしく簡潔な文章と合わせて、時々、見直すと心が安らぎます。大人一人でも、お子さんと読み合っても素晴らしいと思い推奨致します。

作者はロンドンで厳格な家庭に育ったそうです。少女の時から田園を愛して、小動物の観察とスケッチに没頭し、この自然に対する情熱がこの絵本の創作に反映しているそうです。この本は作者がかつての家庭教師の幼い息子、ノエル・ムーアに出した絵手紙を本にして出版する時書き直したものです。

小動物の行動、父が亡くなったおひやくしょうのマグレガーさんの畑に母の言い付けを聞かずに入り込み、野菜を食べてしまい、マグレガーさんに追い回されながら優しいすずめに励まされたりして危機一髪で助かったのです。母さんの包容力、行き渡る心の豊かさと、それを超えてしまうピーター、愛、美、善が底辺にある、傑作と思います。以上です。

『星の子』

今村夏子著 朝日新聞出版 <推薦者：銅谷孝子>

「金星のめぐみ」という水で濡らしたタオルを頭上に載せて毎日の生活をしている新宗教の信者の父母と中学生の娘のお話です。

この宗教に父母が嵌ったのは、成育も危ぶまれる程の乳児湿疹だった娘がこの水で全快し、その上極度の虚弱体質もこの水を生活のすべてに使うことによって健康な小学生に成長出来たと堅く信じたことから始まりました。

宗教が生活のすべての両親は水の通販や合宿集会寄付等に熱心に参加して貧乏でした。この宗教が「真実」か「まやかし」なのか不明のまま流星の美しい夜空を眺める家族を描いて終わり、読者にすべての判断を託します。

この本は今年の芥川賞候補作となり、デビュー作の「こちらあみ子」は太宰賞三島賞を受け、昨年の「あひる」は河合隼雄物語賞で芥川賞候補作にもなりました。非常に寡作の方なので、全作品はすぐに読めますが、これからの未来にどんな作品を提供してくださるか・・・と思うと今村夏子氏の将来と未来の作品へ大いなる期待で私の胸は弾みます。

『Nのために』

湊かなえ著 双葉社 <推薦者：佐藤千帆>

みなさんは「究極の愛」といったらどんなものを思い浮かべますか。この本に登場している杉下希美は究極の愛とは「罪の共有」だと言っています。相手の罪を誰にも知られずに半分引き受け黙って身を引く。これは、本当の愛とは言えるのでしょうか。

私は絶対に違うと思います。一人一人考え方もとらえ方も違うから様々な考えを持つ人もいます。しかし、それでも罪の共有が究極の愛ではないのです。罪を共有しても共有した相手も受け入れた自分も両方とも嫌になってしまうと思うのです。共有した相手も本当に愛している人なら自分と同じような苦しい想いをさせたくないと思います。

だから、罪を共有してもそれは究極の愛には絶対にならないし、それどころか両方とも嫌な気持ちになって、よりすれ違ってしまうものだと考えることが出来ました。

みなさんもぜひこの本を読んで、究極の愛とは、一体何なのか考えてみてください。

『蒼氓（そうぼう）』

石川達三著 新潮社 <推薦者：中尾晃>

人口抑制施策目的の美辞麗句に乗せられた沢山の日本人が海を渡った。神戸三宮にあった移民収容所へ日本全国から「収容」されて来る同胞の過去と現在に疲れた様子や、未来に一縷の夢を抱きながらも不安におののく精神状態をよく描いている。

離日前、45日間の航海、ブラジル・サントス港に着いて各就労地まで配置されるまでの三部作で構成される中でも涙を誘うのは、航海中に命を落とした赤ん坊が棺に国旗を撒かれて見守られながら大海に水葬されながらも、「直ぐに鰯（フカ）の餌となるであろう」と書かれる下りである。家族と共にブラジルの地に辿り着く事なしに命を落としてしまった一人の人間が弔われる様子に息をのみながらページをめくった。

また、小金を持ちながら移民して来る連中が一番始末悪い、大成なんかしたいと思わずに食べて行けるだけで幸せだと思え、と現地監督者から最初から悟された移民の人達全員への感謝なしに読了する事は出来ない一冊。

『坂本龍馬からの手紙―全書簡現代語訳―増補改訂版』

宮川禎一著 教育評論社 <推薦者：長尾敏博>

今年は大政奉還から百五十年、益々人気の高い龍馬関係の本は山程あるが、その人となりがよく分かるのは何といっても手紙だろう。

国事に奔走している中で同志に宛てた手紙が多いのだが、乙女姉さんには本音を伝えているのが微笑ましい。家族への思いやり、好きな女性のこと、家の跡継ぎのこと等、様々なことに気を配る人間味溢れる龍馬の姿が見えてくる。

訳の後に解説が付いているので書かれた時の政治情勢がよく分かる。研究が進み、薩長同盟締結前日の姪に宛てた手紙から、難航する交渉で龍馬の抱えたストレスを推察したり、紙の表裏をはがして一枚にした手紙があったりと非常に興味深い。その一方で日付や宛名等が未だ解明されていない手紙もある。残念なのは妻のお龍さん宛ての手紙が、たった一通しか残っていないという。龍馬の死後彼女が燃やしてしまったとか。

幕末ファンならずとも一読を薦めたい。

『夫トーマス・マンの思い出』

カーチャ・マン著 筑摩書房 <推薦者：吉永靖子>

この本はドイツ文学の巨匠・ノーベル賞作家トーマス・マンの妻、カーチャ・マンがインタビューに応じたものを整理して刊行されたものである。トーマス・マンに対する回想と同時にカーチャ自身の一代記でもあり交友のあった多彩な人々を通してヨーロッパやアメリカの歴史の一端を垣間見せてくれるわくわく興味の尽きない物となっている。

巨匠の素顔はどんなものなのか？ものを書く際には明けても暮れてもそれに没頭、膨大な資料を猛烈な勢いで読みあさり研究し自家薬籠中の物にして、小説の中で見事に使いこなし、原稿に“完”の字を入れた後は、見向きもしない、きれいさっぱり忘れるのだとか。執筆は午前中の3時間のみ、頭が完全に自由にある間だけ。そして、どんな人間でも会うと直ちに丸ごと把握してしまうという、能力。

信じるに値する教育は、良き範を示す事だと、六人の子供達に自ら示したトーマス。人生を見事に生ききった夫妻の旅路録である。

『日本植物誌』

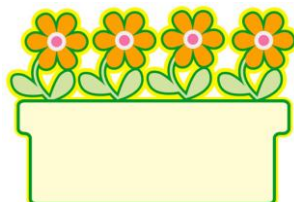
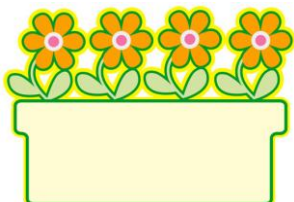
シーボルト著 大場秀章監修・解説 ちくま学芸文庫 <推薦者：名取末子>

フォン・シーボルト。ご存知の方が多いはず、ドイツの医学者190年前、文政のころ、日本長崎オランダ商館の医師に着任、医学のみならず、植物、地理、歴史を滞在中に研究されたことは有名。

その一端本書は植物の形質分析など高度の研究解説があるが、専門的な事は別として、シーボルトが日本植物を写生し日本人絵師などがリアリティに作成補足研鑽を重ねたボタニカルアート（植物画）の傑作。

是非この美しさを見ていただきたい。頁ごとに彩色、葉脈、花、種と識る喜びを味わう事が出来る。

「♪この木何の木、気になる木」植物名を覚えるのが苦手だが、150種を楽しめる貴重な本。神代植物園に足が向くと思います。



『次郎物語』

下村湖人著 角川文庫 <推薦者：池田幸子>

母親のなまじ学識のあるのも考えものだ。次郎の母の民子も孟母三遷の教えに感激して、次郎を乳母に預けたのだが……。就学前に家へ帰っても、ちっとも母になつかなかった。生まれてすぐ里子に出されるなんて、たとえ乳母が盲目的にかわいがってくれたとしても不幸の極みだ。頑なに反抗心を募らせたり、人の顔色を見たり、暗いいたずらに走ったとしても、誰が非難できるだろう。次郎の心痛を思うとせつない。

そんな次郎も小学生となり、たくさんの経験を積んで成長していく。民子が病を得て亡くなるのは、次郎が6年生の時だ。死の床にあって遅まきながら悟る。「子供って、ただかわいがってやりさえすればいいのね。」次郎は最後に母の顔に、泉の底の月光のように、静かな光を感じるのだ。

長いので一章だけでいいと思います。昭和の風に吹かれること請け合います。

『被爆を生きて』

林京子 島村輝著 岩波書店 <推薦者：御園生く江>

毎年10月の始めは、ノーベル賞週間となります。世界中の注目の中5日、スウェーデン・アカデミーは、カズオ・イシグロさんにノーベル文学賞。長崎県出身日系英国人、作品は89年英国文学界最高のブッカー賞を受賞した「日の名残り」と発表され、私共は改めて嬉しさ喜びを深くしました。祝福に国境なし日本の書店は品切れ状態です。

続いて7日平和賞「核兵器廃絶国際キャンペーン」(アイキャン)にノーベル平和賞受賞が発表され、国連や関係国などからは歓迎の声々です。「核兵器なき世界に向け全加盟国がより努力するよう訴えたジュネーブで広島長崎の被爆者全員へも与えうる賞」と強調されました。おすすめの本は、林京子「被爆を生きて」作品と生涯を語る本です。対話形式で読み易くまとめられています。「核」とは共存できない。「祭りの場」から福島原発事故まで、生きることを問い続けて来た作家です。この機会に改めて手にされますことを……。

たくさんのご応募ありがとうございました。
お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。



くすのき
第46回 樟まつり——共に生き、共に学ぶ——

「樟まつり」は、図書館と生涯学習団体「アカデミー愛とびあ」の共催で実施します。

＊詳細は、市報1月20日号や図書館ホームページをご覧ください。

日 時	場 所	催 事 ・ 講 師 等	
2月1日(木) 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「新しい一茶」 長谷川 権氏
2月4日(日) 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「『宇治拾遺物語』のたのしみ方」 伊東 玉美氏
2月9日(金) 午後2時～4時	たづくり大会議場	歴史講演会	「いかにして史実を探るか-本能寺の変を素材として-」 渡邊 大門氏
2月12日(月・振休) 午後1時半～4時	たづくり映像シアター	第45回 市民歌会	「選評と講話」 雁部 貞夫氏, 来嶋 靖生氏, 小島 ゆかり氏
2月14日(水) 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「著書を読む『夫・車谷長吉』」 高橋 順子氏
2月16日(金) 午後2時～4時	たづくり大会議場	文化講演会	「東大寺二月堂『お水取り』の話-神々を招く-」 小島 裕子氏
2月19日(月) 午後2時～4時10分	たづくり大会議場	第46回 市民句会	「選評と俳話」 太田 土男氏, 棚山 波朗氏 権 未知子氏, 坊城 俊樹氏
2月20日(火) 午後2時～4時	たづくり大会議場	文芸講演会	「こうして小説を書いている」 荻原 浩氏
2月23日(金) ①午前10時 ②午後2時	たづくりくすのき ホール	名画鑑賞会	「湯を沸かすほどの熱い愛」 脚本・監督: 中野 量太 出演: 宮沢 りえ, 杉咲 花, オダギリ ジョー ほか

展 示 期 間	場 所	催 事 等
2月8日(木)～12日(月・振休)	たづくり南ギャラリー	調布淡彩画展 (調布淡彩画の会作品発表)

～読書会という楽しみ～ 読書会点描



皆さんは、どのように本を選んでいますか？ 広告や書評、書店のPOP、あるいは家族や友人の薦めなど様々かと思えます。読書会では、自分一人では出会わない本を読みあい、読後感を交換することによって、新たな気づきやつながりが生まれます。図書館で関わっている読書会には、50年以上前から活動している会から、初めてのの方のための読書会、一人の著者の本を読んだり、分野を限定して読むなど多様な会があります。その中のある読書会の様子を紹介します。

水上勉の『ブンナよ、木からおりてこい』を読んだ回の事です。作品の背景や作者が紹介された後、子どもから大人まで、年齢に関係なく読む本というのはそう多くはないがこの本はそうだと思ったという人。水上勉の作品で最も心を打たれたという人、それはどうしてなのかという問題提起があり、活発な話し合いが行われました。動物の世界を描きながら、人間の生き方を示唆してくれると「不幸はいつも幸福の背中あわせにすんでいる」「生き物はみな孤独なときに、母のことを思うものなのではないか」など読み上げた人もいらっしゃいました。

終わり近くに、Aさんが車いすで娘さんとともに登場。娘さんは母が楽しみにしている読書会に入り、最近家で母にテキストを朗読し一緒に参加されています。Aさんは長時間の参加が難しくなってきましたが、仲間の輪に迎えられ微笑まれました。とても温かな光景でした。

平成29年度 絵本の読み聞かせ講座



講座の様子

図書館では、年に一度、図書館の職員が講師となり、絵本の読み聞かせについての連続講座を開催しています。絵本の選び方や読み方のポイントなどをご紹介します講座で、毎年多くの方にご参加いただいています。

今年度は、10月5日（木）、10月12日（木）、10月19日（木）の3日間で行い、21人の方に参加していただきました。学校などで実際に読み聞かせをされている方、これから読み聞かせに関わろうと考えている方など、様々な方が熱心な様子で受講されていました。

講座では、参加者の皆さまに実際に絵本の読み聞かせも実践していただきました。お互いの読み聞かせを聞くことで、絵本の世界を楽しみながら学びあう会にすることができました。

「絵本の読み聞かせ講座」は、毎年開催しています。小学校などでの読み聞かせで困っている方や、絵本に興味のある方など、ぜひお役立てください。

また、市内の各図書館では、読み聞かせのガイドブック「今日のおはなしなー?」、「読み聞かせにすすめる本～小学生向き～」を配布しています。ご覧ください。

法務ミニセミナー「図書館のひみつ」「図書館の秘密」開催報告

8月26日（土）夏休み子ども向け講座として「図書館のひみつ」、9月16日（土）、9月30日（土）大人向けの「図書館の秘密」を開催しました。講師には、いくつもの図書館を使いこなす山賀先生と、成年後見制度や相続に詳しい寺田先生の行政書士二人をお招きしました。

子ども向け講座では、図書館の利用のしかたや、なぜ無料で使えるのかなど、図書館に関する法やきまりのお話のほか、紙に印刷された本だけでなく、布の絵本や点字の本も実際に手に取ってもらいました。

子どもたちからたくさんの意見が出て、とても活発で楽しい講座となりました。



展示の様子

大人向けでは、前半は「図書館法」を参照しながら本についている番号や無料で使える理由など図書館のサービスについてのお話がありました。後半は成年後見制度についてや遺言書の書き方、相続に関する本や情報の探し方などのお話があり、多くの参加者が興味深そうに耳を傾けていました。

また、会場には関連する本だけでなく、開館51周年を迎えた図書館の写真も展示しました。開館当初の懐かしい写真に見入っている方もいらっしゃいました。



講座の様子

お風呂が珍しかった時代

関 口 宣 明

深大寺地区に伝わるむかしの笑話です。

おじいさんが、「こりゃあ、風呂が熱いや」って、おばあさんに言ったら、

「ああ、じゃあ、これ、かぶんない」って、笠あ持ってったって。

風呂になじみのなかったおばあさんが、「熱い」を「暑い」と勘違いして、日よけの笠をかぶったらいいと持ってきたというのです。この話のおもしろさは、家庭に風呂が広まった今日では、理解しにくいことでしょう。

水道や、ガスが無かった時代には、風呂を沸かすということは大変な労力のいることでした。水を、家の外にある井戸や用水堀から汲んで風呂にためるには、重い手桶（今のバケツ）を持って、風呂場とのあいだを何往復もしなければなりません。薪もたくさん集めなければなりませんでした。多摩川べりの村では、大雨の後には、流木がたくさんあったので、それを拾って焚き物（燃料）にしました。

そもそも、今では当たり前の生活習慣となっている、入浴するという行為の始まりは、お寺でした。入浴して、身体の汚れを落とし、清めることが、修行のひとつだったのです。そのため、お寺には、浴室が設けられました。そして、その浴室を、日を決めて檀家である農家の人々にも開放することが宗教上の功德（良い行ない）と考えられていました。

旧金子地区（現在の西つつじヶ丘あたり）の古老の話では、風呂のある家があまりなかった頃には、お寺で湯を沸かし、住職が入り終わると、拍子木をたたいて、近所の人たちに風呂に入りにくるように知らせていました。入る順番も近所で決めていて、毎日、その順に従って風呂に入ったそうです。

このあたりの農家で、風呂場が設けられ始めたのは、明治時代の後半に、養蚕に力を入れる



屋根に「けむだし」のついた風呂場

ようになって、家の改造がすすんだことがきっかけになったと考えられます。それまでは、ほとんどの家に風呂がなかったので、行水をしたり、お寺や近所の数少ない風呂のある家で「もらい風呂」をしていました。

風呂を沸かした家では、お茶や菓子などをふるまうこともあり、風呂を待つ人、風呂上がりの人がお茶を飲んで世間話をするなど、村人の交流の場ともなっていました。

農村生活では、冠婚葬祭を始め、田植え、麦の脱穀、家の屋根ふきなどの共同でする作業がかかせないものだったので、日頃の村人同士の交流はとても大切でした。

こうして風呂が珍しかった時代に、「もらい風呂」は、身体を温めるとともに、農村という共同体の絆を深めるのに一役買い、村人同士がつながる安心感ももたらしたといえるでしょう。参考文献：『調布市史〈民俗編〉』（昭和63年）

刊 行 物 番 号

2 0 1 7 - 1 6 2

図書館だより 第246号

平成29年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/
